

話段からみたドイツ語の試験会話中間部の 展開パターンと話段の終了 —統語・音声・語用論的完了に注目して—

坂 本 真 一

1. 研究目的

本研究は、試験会話の中間部にみられる特定の展開パターンの傾向と会話の局面 (Phase) の終了にみられる言語的特徴を探るために、実際の会話データを取り上げ、多角的な視点から分析するケーススタディである。試験会話とは大学などの高等教育機関にみられる会話のジャンルで、学位論文の口頭審査のほか、学期末に単位取得のために行われる口述試験などの会話を指す。日常会話と異なり、「制度的場面の会話 (institutional talk)」に属する。制度的場面の会話の特徴には、会話の目的に応じた特定の展開パターンがみられること、そして会話参加者の役割によってジャンルに応じた非対称な関係性がみられることなどが挙げられる (cf. Hakulinen 2009: 58 ff)。これらの特徴は、会話参加者の無意識下のもと「そうあるように話される (talked into being)」ことで形成されると考えられている (e.g. Drew & Heritage 1992)。そのため、本研究では会話の展開を、会話参加者が互いに調整し合い、また協力し合いながら構築され、終結へと運んでいく相互行為のプロセスによって具現化したものと考ええる。会話で相互行為がどのように構築されるのかを分析するには、ケーススタディとしての詳細な分析が欠かせない。

試験会話では1人の話者がターンを保持している時間は比較的長い。長いといっても、講演や発表のようなモノログではない。1人の話者が長い間話す場合、ターンの終了を合図し、互いに認識し合うことは相互行為の上で重要 (relevant) であり、その合図には言語的特徴 (統語、語彙、音声、語用論など)・非言語的特徴 (視線やジェスチャーなど) が関わることは以前より指摘されてきた (e.g. Selting 2000, Ford & Thompson 1996)。しかし、試験会話のように特定の展開パターンがある会話の場合、期待された適切な量と質の回答が十分に提示されるまでは、いくらターンの終了が示唆されても回答そのものは終了しない。逆に相手が、ターンの終了を合図していなくても、試験官としての立場にある話者は比較的容易にターンを取

得することもできる。このような、試験会話特有の展開パターンに焦点をあて、言語的特徴などから分析を行った先行研究は管見の限り見当たらない。

本研究は、アメリカの会話分析を基礎とし後にヨーロッパで発展した相互行為の言語学 (Interactional Linguistics) (Couper-Kuhlen & Selting 2001) の方法論に従う。会話の流れや発話の状況において絶えず変化するコンテキスト (文脈) を示唆する言語的特徴や非言語的特徴を「コンテキスト化の合図」(Gumperz 1982) とよぶ。相互行為の言語学では、会話で用いられる言語的・非言語的特徴はコンテキスト化の合図として機能すると考え、発話がどのように構築され会話の構造や展開に貢献し、また相互行為上どのような役割を果たすのかを明らかにする (Couper-Kuhlen & Selting 2001)。近年、会話・談話を対象とした研究では雑談などの日常会話をデータとして扱うことが比較的多く、制度的場面の会話を扱うことは以前と比べて少ない。また、音声分析を会話の構造や展開パターンなどの大きなレベルで分析する研究もまだ多くはない。このような背景から、本研究は試験会話上で果たす音声の役割という新しい課題への基礎研究としても位置付けられる。

2. 先行研究

2.1 試験会話の中間部の構造

会話は構造上、局面 (phase) で区分され、「導入部」・「中間部」・「終了部」の3つに分けられる (cf. Levinson 1983)。試験会話の場合、導入部および終了部は、試験会話の開始または終了するやりとりに、中間部は質問や回答などが実際に観察される部分に相当する。

中間部においては、更に下位分類される部分的な局面 (Teilphase) があるとされる (cf. Henne & Rehbock 2001⁴: 180)。中間部の内部がどのようにして区切られるのか、あるいは形成されるのかについては、会話全体の長さやジャンルなどの様々な要因が関わる。試験会話の中間部はある話題 (試験のテーマ) を軸に展開

していく。話題の切り替わりは、試験官が質問 (Prüfungsfrage) をすることによって通常成立する。そのため、中間部内の部分的な局面を分析するにあたっては、質問の発話とそれに対する回答が軸となる。

2.2 話段

会話分析における最も基本的な単位は、1人の話者が発話権をもち話すまとまり、すなわちターンである。そしてターンとターンとの組み合わせは「応答ペア」¹を形成する。応答ペアとは、たとえば(A)「質問」の発話とそれに対する(B)「答え」の発話同士のペアのことを指す。また、一方の話者が話しをしている最中に、もう片方の話者から関連する質問やコメントがされるが、話題が変わらないこともある。そのため「応答ペア」の概念だけでは中間部内部にみられるある一定のまとまりを把握するのは難しい。

そこで本研究では、ザトラウスキー (1993) の「話段」という単位を援用する。「話段」とは「2つの発話からなる「応答ペア」を発話の発話集合に当てはめようとしたもの」(ザトラウスキー 1993: 71) であり、「談話の内部の発話の集合体 (もしくは一発話) が内容上のまとまりをもったもので、それぞれの参加者の「談話」の目的によって相対的に他と区分される」(ザトラウスキー 1993: 71)。この「応答ペア」よりも大きな単位である話段を用いることによって、中間部内部の局面を把握できるようになる。話段の特徴には、「話題」、「発話機能」、「音声」があり、そのほか「メタ言語的発話」、「イニシアティブ」、「話者交替」などがあげられる (cf. ザトラウスキー 1993: 71)。

3. 分析方法

3.1 ターン構成単位(TCU)とターンの完了・継続

話者交替で、先行する話者のターンが終了した上で起きたのか、それとも継続が示唆されていたにも関わらず起きたのかを探るため、ターン構成単位 (turn constructional unit、以下 TCU) を手がかりに分析する。1つのターンが1つの TCU で構成されるターンのことを「単一の TCU によるターン (single-unit turn)」とよぶ。一方、1つのターンの中にいくらかの TCU がみられるターンのことを「複数の TCU によるターン (multi-unit turn)」とよぶ (e.g. Schegloff 1996: 61)。TCU は、発話の完了または未完了という観点から分析される。発話の完了には統語・音声・語用論的要因が複雑に関わることがすでに多くの先行研究で報告されている (e.g. Selting 2000, Ford &

Thompson 1996, Gilles 2005)。

統語的完了 (syntactic completion) は、発話全体が文法的に正しいかどうかで決まる。ドイツ語の場合、例えば *geben* のような主格、与格、対格の名詞 (または文成分) を要求する動詞の場合、これらが発話の中に過不足なく確認されれば、文法的に正しいと認識され、その発話は統語的に完了となる。

音声的完了 (phonetic completion) は、発話末に急な上昇イントネーション (?), または急な下降イントネーション (.) を伴う。一方、音声的未完了 (phonetic incompleteness) は、平坦イントネーション (-) のほか、緩やかな上昇イントネーション (,) または緩やかな下降イントネーション (;) によって示唆される²。

統語的な完了と音声的な完了が一致していても、1つの TCU を構成するとは限らない。ここで、語用論的完了 (pragmatic completion) という観点が重要となる。語用論的完了は局所的 (local) と全域的 (global) と区別される (cf. Ford & Thompson 1996: 150–151)。局所的完了では、聞き手が最小限のターンを取得し、あいづちまたは短いコメントの発話がみられる。一方、全域的完了とは、語りや説明などの長いターン、つまり複数の TCU によるターンが終了する部分で、発話がそれ以上の継続を示唆しない場合を指す。1人の話者が話順をもつ時間が長く、複数の TCU によるターンの形成が多いと予測される試験会話では、この語用論的完了の分析は欠かせない。Ford & Thompson (1996) は、全域的な語用論的完了は分析者の直感に基づくとしているが、本研究ではできるだけ客観的に捉えるため、話段で支えられた会話の展開構造を頼りに全域的な語用論的完了を認定した。

分析手順としては、まず統語・音声両方のレベルでの完了の一致を調べ、その上で語用論レベルでの完了かどうか判断した。本稿では、それぞれの発話について、統語的 (S)・音声的 (Ph) 完了は C (complete)、未完了は I (incomplete) で記した。語用論的 (Pr) 完了については、局所的 L (local) または全域的 G (global) のいずれか、また未完了の場合は I (incomplete) で記した。更に、完了 (C・L または G) の部分は灰色で示した。

3.2 分析データ

本研究では FOLK (Forschungs- und Lehrkorpus Gesprochenes Deutsch) コーパスに収集されている「試験会話」の1つ “FOLK_00003” のデータ (20分29秒) を扱い、その会話の中間部を分析対象とする。前述の通り、会話の中間部は試験会話の中心となる部

¹ 隣接ペア (adjacency pair) のこと。応答ペアの訳はザトラウスキー (1993) による。

² 本研究では GAT 2 に従い発話をイントネーション・フレーズ (Intonationsphrase、以下 IP) と同一に扱う。

分で、教師と学生の関わり合いが最も顕著に現れ、試験会話の展開で最も複雑なプロセスが観察される。会話データは合計6つの話題（試験のテーマ）からなる。その中から2つ目の話題（2分23秒）を会話例として示しながら論を展開する。当該部分が限られた紙幅で、教師と学生の関わり合いという観点からの分析結果を提示するのに最も適切であると判断したためである。会話参加者は試験官（JS）、学生（DM）である。プロトコル作成者（XA）も同席しているが実際の会話に積極的には参加していない。

トランスクリプトはインターネットで公開されているが、音声情報は反映されていない。そのためGAT 2 (Selting et al. 2009, 英訳: Couper-Kuhlen & Barth-Weingarten 2011) に従い、プロソディの転記作業を行った。会話分析における分析カテゴリーはあくまで会話参加者の立場から決定されるため、聴覚印象に基づく分析が第一に行われる。近年では音声分析の技術が発達したことから、聴覚分析で得られた結果を音響音声学的手法によって精査する作業も可能である。以上の背景から、プロソディの転記は聴覚分析と音響音声学的分析の両方を行った。その際、音声分析ソフトPRAAT (Boersma & Weenink 2016) を使用し、波形やピッチ曲線の視察のほかポーズの時間長の計測をした。

4. 試験会話の中間部の構造と言語的特徴

4.1 話段のレベルでの会話の展開パターン

本節では分析結果から得られた話段の連鎖を示す。話題（試験のテーマ）を軸に観察したところ、データ“FOLK_00003”には6つの話題が確認された。話題毎に繰り返された展開パターンは、次の通りであった。

- (A) 第1の話段 <試験官の質問> (FRAGEN)
- (B) 第2の話段 <学生の回答> (ANTWORTEN)
- (C) 第3の話段 <試験官のコメント> (KOMMENTAR)
- (D) 第4の話段 <学生の反応> (REAKTION)

(A)「試験官からの質問」の話段では試験官が質問(Prüfungsfrage)することで新しい話題が導入される。続く(B)「学生の回答」の話段では、(A)の質問に対して、学生が回答をする。学生は授業などを通して得た知識をもとに、ある問題点に対する「意見」を述べるほか、「説明」をする。(C)「試験官のコメント」は(B)「学生の回答」が終了した直後にみられる話段である。「コメント」といっても、学生の回答内容を踏まえた試験の結果などの評価が示されるわけではない。むしろ、「学生の回答」の話段で聞いた内容をどのように理解したのかが簡単に示される。その場合、「まとめ」のような性質をもつ。最後の(D)「学生の反応」は(C)

「試験官のコメント」に対して「反応」を示す話段である。例えば、試験官の理解が正しいかが示される。試験官があらかじめ用意した質問が全て終わるまでは繰り返し(A)に戻るが、質問が全て終わると中間部から終了部へと移行する。

この一連の連鎖は、データを通して繰り返し観察されたことから、会話参加者が無意識のうちに従い、そのプロセスのもと会話が展開することを互いに了承していたものと考えられる。別の観点から述べると、話段の内部でいくつもの話者交替が発生し、複雑に会話が進展したとしても、話段レベルの局面が終了しない限り次には進まない。そのため、話段の終了が示唆されることは相互行為として重要だと言える。次節では、話段内部の構造と話段の終了の2つの観点から、どのような言語現象がみられるのかに注目する。

4.2 話段内部の構造と話段の終了

4.2.1 「試験官の質問」

4.2.1.1 話段内部にみられる連鎖

まず初めに「試験官の質問」の話段として会話例(1)を示す。この話段は、複数のTCUで構成されていることが多く、ある特定の連鎖が確認された。会話例(1)を例に示すと、【07-08】「ターンの取得」→【09】「質問の前置き」→【11-17】「質問」→【19-28】「質問の理由」である。以下、JSは試験官、DMは学生である。また表1では聞き手としての学生がどの部分で反応を示しているのか、またどのタイミングでターンを取得するのかを視覚的に示すため、記号(◀)で記してある。

「試験官の質問」の話段は、【07】冒頭の↑*genau*によって開始する。↑*genau*の冒頭のイントネーションは高い。発話冒頭のピッチが高いことは新しい話題が導入を示唆する (cf. Couper-Kuhlen 2004)。そのため、↑*genau*は「同意」を示す応答詞ではなく、ディスコース・マーカーとして機能していると考えられる。【07-08】には実質的な内容を伴う発話はない。従って【07-08】は「ターンの取得」と位置付けられる。

【09】の発話 *jetzt ham sie sich mit verSPREchern beschäftigt* は、会話の流れから学生に対する（確信を持った）「確認の発話」と受け取れる。後続の【11-17】 *Was hat ihnen denn die beschÄftigung mit verSPREchern; in beZug auf; deutsch als frEmdsprache; geBRACHT?* は、ある具体的な内容を問う発話である。つまり、この発話が「試験官の質問」の話段の中で最も中心となる「質問の発話」である。そのため【09】の「確認の発話」は「質問の前置き」としても機能していたと考えられる。

そして【19】 *WEIL-* は本来理由を導入する従属接続詞である。しかし、後続する発話の統語構造に定動詞

表1 「試験官の質問」の話段のTCU分析と連鎖分析

| 会話例(1): 「試験官の質問」の話段 | | | | S | Ph | Pr | |
|---------------------|----|---|--|---|----|----|--------|
| 01 | JS | un dass man nicht immer also geZWUNGen ist =sozusagen; | | C | I | I | |
| 02 | | immer äh EInen schritt nach dem nächsten zu zu absolvIEREN, | | C | I | I | |
| 03 | | sondern dass man auch mal schritte überSPRINGen kann. | | C | C | G | |
| 04 | | (0.2) | | | | | |
| 05 | JS | [(ne)? =beispielsweise (.) ne?] | | C | C | L | |
| 06 | DM | [genAU das Auch (.) genAU] (.) rIchtig | | C | C | G | |
| 07 | JS | °h ↑geNAU.=ähm- h° | | I | I | I | ターンの取得 |
| 08 | | (0.31) | | | | | ↓ |
| 09 | | jetzt ham sie sich mit verSPREchern beschäftigt. | | C | C | I | 質問の前置き |
| 10 | | (0.2) | | | | | ↓ |
| 11 | JS | !WAS!- (.) ähm- (.) | | I | I | I | 質問 |
| 12 | | hat ihnen denn die beschÄftigung mit verSPREchern. | | I | C | I | ↓ |
| 13 | | =in beZUG auf; | | I | I | I | ↓ |
| 14 | | (0.51) | | | | | ↓ |
| 15 | | deutsch als frEmdsprache; (.) | | I | I | I | ↓ |
| 16 | DM | ((lacht)) | | | | | ◀ |
| 17 | JS | geBRACHT? | | C | C | L | ↓ |
| 18 | DM | °hh | | | | | ◀ |
| 19 | JS | WEIL- (.) | | I | I | I | 質問の理由 |
| 20 | | es is jA- (.) | | I | I | I | ↓ |
| 21 | | ↑ich ↓MEIne, | | I | I | I | ↓ |
| 22 | ? | <<pp> mh (.)> | | | | | ↓ |
| 23 | | es is ↑schOn interesSANT. | | C | C | L | ↓ |
| 24 | | (aber ich) [kann eini]ges Ablesen, | | C | C | I | ↓ |
| 25 | DM | [ja;] | | | | | ◀ |
| 26 | JS | °h aber ↑wAs:- =↓äh- | | I | I | I | ↓ |
| 27 | | verSPREcher sind ja eigentlich eher <<dim+rall> wAs wAs-> (.) | | I | I | I | ↓ |
| 28 | | bei <<t> !MU!ttersprachler[n unterSUcht wird.>] | | C | C | G | ↓ |
| 29 | DM | [wAs bei MUttersprachle]rn is. | | C | C | G | ◀ |
| 30 | | =also [die] Auswahl ka:m ei[gentlich eher] sO in bezUg auf die ähm moDElle? °h | | C | I | I | |

の後置はみられない。ここで *WEIL* は「理由」を導入するディスコース・マーカーとして機能していると考えられる。従って、この文脈において【19-28】は「質問の理由」となる。

4.2.1.2 「試験官の質問」の話段の終了

次に TCU の観点から、ターンの終了を分析する。【09】・【17】・【23】・【28】の各発話末で統語および音声レベルでの完了が確認された(表1 灰色の部分に注目)。各発話内では文法上必要な要素がそろっているため、末部にて統語レベルの完了となる。そして発話末には急な下降イントネーションまたは上昇イントネーションが観察されるため、音声レベルでも完了となる。語用論レベルでの完了は【17】・【23】・【28】で観察された。【17】・【23】は局所的 (local) な完了である。なぜなら、【18】で DM の吸気° *hh* が発生し、【25】で DM のあいづち *ja;* が観察される。ドイツ語の場合、継続を促す機能をもつあいづちは TCU 末付近で頻繁に観察される (Selting 2000: 511)。そのため、【25】のあいづち *ja;* は学生自身が【23】の発話までを1つの TCU として認識していたことの証拠となる。【17】と【23】に局所的 (local) な完了がみられるが、試験官 JS のターンはそのまま継続し、実際に話者交替が発生するのは【29】の部分である。従って、直前の JS【28】の発話末が全域的 (global) な完了となる。

以上の分析より、統語・音声・語用論の3つのレベルで完了がみられた【17】・【23】・【28】の部分に TCU としてのまとまりの区切りがあると考えられる。学生は「試験官の質問」の話段の最中、「質問」の直後にターンを取得しようと試みたが、教師 JS がすぐに「質問の理由」を話し始めたので、ターンが終了するタイミングを待っていたのであろう。統語・音声・語用論の完了が示唆するターンの終了は聞き手にとっても重要な役割を果たす。

4.2.2 「学生の回答」

4.2.2.1 「学生の回答」の話段の概観

「学生の回答」の話段では試験官に替わり学生がイニシアティブをとる。しかし、試験官は学生の回答が終了していても、別の質問を投げかけたり、また自身の考えを述べたりする場合もみられた。それらの発言は、新しい話題を導入する性質は持たず、学生の回答内容の方向性を決定づける。学生がイニシアティブをとる様子も変わらない。そのため観察された話者交替は小さいレベルでのやりとり (turn-exchange) として「学生の回答」の話段全体の中に位置付けられる。以下、「学生の回答」(中間部2つ目の話題)の開始から終了までの概観を図1にて示す。

学生が回答をしている最中に、試験官は「確認の質

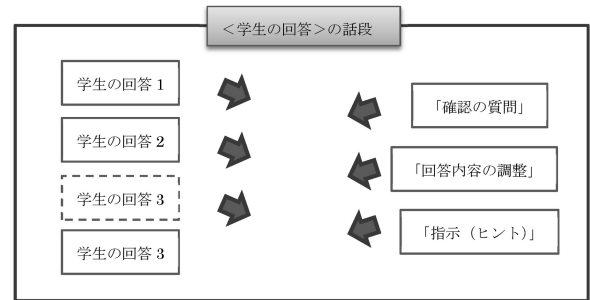


図1 「学生の回答」の話段全体の流れ

問」や「回答内容の調整」の発言をする。しかし、学生はうまく答えられない状況になる(図中点線)。その後、試験官は「指示(ヒント)」をし、それに基づいて学生は回答をすすめる。図1のように、「学生の回答」の話段内では話者交替が発生することが多く、中間部の中でも最も複雑な展開となることが多かった。それでは「学生の回答」の話段内部の話者交替と、話段の終了部分の話者交替とでどのような違いがみられるのだろうか。以下、4.2.2.2.では話段内部の話者交替を、4.2.2.3.では話段の終了部分を示す。

4.2.2.2 話段内部にみられる話者交替

「学生の回答」の話段の最中に試験官が発言することで話者交替が発生した場合、話段が終了していない時点での割り込みの発話となる場合が多かった。以下、会話例(2)では、図1で紹介した「話題の調整」および「指示(ヒント)」の話者交替の部分を示す。【59-65】は「学生の回答2」、【66-69】は「話題の調整」、【78】は「指示(ヒント)」,そして【81】以降は「学生の回答3」である。

「学生の回答2」では統語・音声・語用論全てのレベルが揃った完了はみられなかった。学生 DM は【60】の *wie* に始まり、【62】の *gUten*、【64】*guten GORgen*、【65】(*das*)*sowieso(vorher)-*の発話で、例を提示しつつ説明を続けようと試みている。しかし、試験官 JS は【66】以降、割り込み発話でターンを取得する。JS は DM の発話でターンの終了が示唆されていないにもかかわらずターンを取得したのである。

JS の発話【66-69】は統語上一連の発話 (*ah wAs wAs wÄre denn da:- wa was wÄre denn wa n n ne mögliche ↑URsache dafür. dass es sOlche verSPREcher gibt- dA auf der phoNEMebene;*) として捉えられる。一方、音声上は4つの IP に区切られるが、次項図2で示す通り、イントネーションレベルでデクリネーション(全体的下降)が観察された。

【67】*wa was wÄre denn wa n n ne mögliche ↑URsache dafür.*の発話末の急な下降イントネーションによって一旦完了が示される(図2左から2つ目の区間)。しかし、デクリネーションによって、後続する

表2 「話題の調整」前後のTCU 分析と連鎖分析

| 会話例 (2) : 「話題の調整」と「指示」 | | | | S | Ph | Pr | |
|------------------------|----|---|--|--------|--------|----|----------|
| 59 | DM | [also s pho]nEme (.) mitnander verTAUscht werden können, °h | | C | I | I | 学生の回答 2 |
| 60 | | <<t> ähm w[ie]> | | - | - | - | |
| 61 | JS | [gibt] _s da AUch [(n)] | | - | - | - | |
| 62 | DM | [gUten.] | | I | C | I | |
| 63 | JS | ja? | | | | | |
| 64 | DM | gUten GORgen, | | C | I | I | |
| 65 | | [(das) sowieso (vorher)-] | | I | I | I | |
| 66 | JS | j[a?=°h <<f+h> ah wAs wAs] wÄre denn dA:-> (.) | | I | I | I | 話題の調整 |
| 67 | | <<all> wa was wÄre denn wa n n ne> <<rall> mögliche ↑URSache dafür.> (.) | | I | C | I | |
| 68 | | <<p+all> dass es sOLche verSPREcher gibt== | | C | I | I | |
| 69 | | =dA auf der phoNEMebene;> | | C | C | G | |
| 70 | DM | (0.25) | | | | | (学生の回答) |
| 71 | | ((schmatzt)) °h dass sie DINge:- (.) | | I | I | I | |
| 72 | | ähm- (0.22) | | I | I | I | |
| 73 | | ne mögliche URsache. | | I | I | I | |
| 74 | | (2.48) | | | | | |
| 75 | | °h | | | | | |
| 76 | | (0.75) | | | | | |
| 77 | | ähm ja--[also)] | | I | I | I | |
| 78 | JS | [also s_hat] ja auch n bIsschen was mit den moDEllen [zu tun.=↑SCHEINbar.] | | C C | C C | L | 指示 (ヒント) |
| 79 | DM | [°h es hat sich (.) ja natÜr]lich hat_s was mit [den moDEllen zu] TUN.= | | C | C | G | 反応 |
| 80 | | [(tendenz)] | | | | | |
| 81 | DM | =ähm- (0.33) °h | | I | I | I | 学生の回答 3 |
| 82 | | also dass gewisse Ebenen schon <<len> v:Orher> (0.29) AUFGebaut sind? | | C | C | I | |
| 83 | | =<<all> wie zum beispiel> die SILben? (.) | | C | C | I | |

【68】および【69】までが大きなまとまりとなる³。
【69】の発話末は統語的完了である。一方【69】の発話末は緩やかな下降イントネーションであり、本来発話は未完了である。この部分ではすでにJSにとって比較的低い声域に達しているため、急なピッチ変化は生理的に難しい。更に【70】では0.25秒のポーズが発生

しているため、音声レベルでも完了とみなすことができる。従って、【69】の発話末には、統語・音声・語用論全てにおいて完了が示唆されていたと考えられる。
続く【70-77】の区間では、DMが回答を続けられない状況に陥る。その区間の発話は全て未完了であった。そこでJSは【78】also s_hat ja auch n bIsschen was mit

³ いくつかのIPを覆ったÄußerungsphrase(utterance phrase)が形成される。このレベルの区切りにはデクリネーションおよびピッチリセット(pitch reset)が関係する(cf. Peters 2014 : 77-80)。

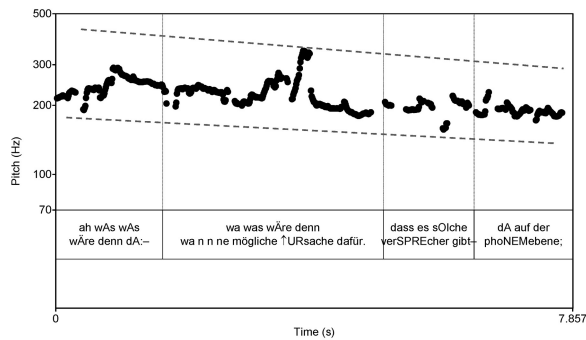


図2 JS「話題の調整」の発話全体のイントネーション

den moDEllen zu tun. = ↑ SCHEINbar:で「指示(ヒント)」を示す。JSはDMのターンが終了していないにも関わらず、ターンを取得したのである。

以上、「学生の回答」の話段内部にみられる話者交替では、先行する学生DMの発話で統語・音声・語用論3つのレベルが揃った完了がみられなかったことを示した。つまり、学生のターンは終了していないにも関わらず、試験官は割り込みでターンを取得した。

4.2.2.3 「学生の回答」の話段の終了

それでは、「学生の回答」の話段の終了部分はどうだろうか。以下、会話例(3)を用いて、「学生の回答」から「試験官のコメント」へと移行する部分を示す。【101-106】は「学生の回答3」の終了部分、【107-110】は「試験官のコメント」の話段である。

【105】in dem onset zum BEispiel. は、in dem onset および zum Beispiel の2つの前置詞句が連続した発話である。これらの発話は主部と述部を含む文を形成していないが、それぞれ前置詞句として必要な要素は揃っ

ているため統語的完了となる。また発話末では急な下降イントネーションによって音声的完了も示唆されている。会話の流れに注目すると、この時点で学生は、前節でみた試験官からの「話題の調整」の発言をもとに説明(回答)を続けている。学生は【104】ANlautないし【105】onsetで説明をまとめるためのキーワードを示した⁴。つまり、「話題の調整」で試験官が求めていた情報は【105】までに説明され、学生はこれ以上「説明」という行為(action)をする必要はなく、発言内容の理解に差支えはない。従って、この地点で全域的(global)な語用論的完了となる。

話段が移行する部分では、直前の学生の発話でターンの終了が示され、試験官はターンを引き継ぐ。JS【107】の冒頭の短いポーズ(.)の後にみられる吸気^hは、JSが「これ以上DMは会話を続けない」と認識していることの証拠でもある。ところで、「学生の回答」の話段の最中にみられた全てのDMの発話で、統語・音声・語用論の3つのレベルで完了が揃い、ターンの終了が示唆されたのは【105】が初めてであった。それ以外の部分では、統語・音声の一方が未完了か、両方が完了であってもすぐに次の発話へとかけこむ様子が多々観察された。いずれにせよ「学生の回答」の話段の内部では、いくつかの話者交替が発生しているものの、【105】の発話の時点で終了となった。

4.2.3 話段の終了とプロソディ

TCUの観点から話段の内部や終了部分を分析した結果、統語・音声・語用論のレベルで完了が揃う発話末にて「ターンの終了」が示唆されていることが分かった。しかし、「ターンの終了」によって話者交替が

表3 「試験官のコメント」および「学生の反応」の話段

| 会話例 (3) | S | Ph | Pr | |
|---|---|----|----|-----------------------|
| 101 DM also [(wÄr)] (.) On? | - | - | - | 学生の回答 3 |
| 102 JS <<h+f>[hm_hm,]> | - | - | - | |
| 103 DM (0.21) | - | - | - | |
| 104 <<len> ANlaut.> (.) | C | C | | |
| 105 <<t> in dem [onset] zum BEispiel.> | C | C | G | |
| 106 JS <<p>[hm,]> | - | - | - | |
| 107 JS (.) °h s_übrigens ja auch äh n beWEIS, | C | I | I | 「試験官の コメント」の話 段 |
| 108 der häufig heRANgezogen wird== | C | I | I | |
| 109 =dass die sIlbe eben dOch (0.24) klEinste BAUstein; | I | I | I | |
| 110 (0.33) | - | - | - | |

⁴ ANlautは音韻論の分野の用語で、音節構造における「頭部」のことである。英語でonsetという。DMは初め【101】で英語の用語を出そうとするが、途中で断念し、【104】でドイツ語の用語を出す。そして【105】ではまた英語を用いている。

発生したとしても、会話の展開上の局面が変化するとも限らない。試験官が内容を掘り下げるために新たに発言する可能性も考えられる。データを観察する過程で音声に注目していると、話段の終了部分には発話末尾イントネーション以外のプロソディも重要な役割を果たしていることが分かった。本節では、話段の終了部分にみられるプロソディをいくつか示す。

会話例(4):「試験官の質問」の終了

26 JS: °h aber ↑wAs: - = ↓äh -
 27 verSPREcher sind ja
 eigentlich eher
 <<dim+all> wAs wAs -> (.)
 ->28 bei ↑!MU!tter
 <<t> ↓sprachler[n
 unterSUcht wird.>]
 29 DM: [wAs
 bei MUttersprachle]rn is.

会話例(4)は「試験官の質問」の話段の終了部分である。JS【28】では音の高さ(ピッチ)に関する現象がみられた。まず、発話冒頭の複合語↑!MU!tter ↓sprachlernの語頭の音の高さは高く、↓sprachlernの部分ですぐに低くなる。そして、↓sprachlernの部分から発話末にかけて、ピッチ・レジスターが低い(<t>)⁵。複合語↑!MU!tter ↓sprachlernにアクセントが観察されたことを考慮すると、おそらくは語の強調がピッチの高低に変化を与えた可能性がある。しかし、一度下がったピッチがそのまま低いピッチ・レジスターの域のまま発話末まで続いていることは、「ターンの終了」から転じて「話段の終了」を示唆している可能性がある。なぜならば、「試験官の質問」の話段全体の各TCU末では、【28】の部分のみに声域の低さが共起していたからである。

会話例(5):「学生の回答」の終了

101 DM: also [(wär)](.)On
 102 JS: <<h+f>[hm_hm,]>
 103 (0.21)
 ->104 DM: <<len> ANlaut.>(.)
 ->105 <<t> in dem [onset] zum
 BEIspiel.>
 106 JS: <<p>['hm,]>

会話例(5)は「学生の回答」の話段が終了する部分

である。会話例(5)と同様、音の高さに関する現象が見られたほか、話速についても変化がみられた。【104】のANlautは話速が遅い(<<len>)。続く【105】の発話in dem onset zum BEIspiel.ではフレーズ全体のピッチ・レジスターが低い(<<t>)。【105】の時点で「回答」または「説明」が終了するという点を考慮すると、話速の遅さおよび声域の低さは「話段の終了」を示唆していると考えられる。

会話例(6):「試験官のコメント」の終了

107 JS: (.)°h s_übrigens ja
 auch äh n beWEIS,
 108 der häufig heRANGezogen
 wird -=
 ->109 =dass die
 /sIlbe eben
 /dOch
 (0.24)
 /klEinste
 /BAU
 /stEIn ;
 ->110 (0.33)
 111 DM: °h(.)geNAU. =

会話例(6)は「試験官のコメント」の終了部分である。【109】は統語上発話末にコピュラ動詞seinが予測される。しかし、実際にはBAUstEInで発話は途切れ、統語上完了していない。発話末は緩やかな下降イントネーションであるため、音声的にも未完了である。しかし、0.33秒にもわたるポーズはターンの譲渡を示唆する可能性があり、この会話例において実際に話者交替は発生している。統語上完了間近であったことのほか、長いポーズが発生したという要因が重なり、暗示的に「ターンの終了」を示していたのかもしれない。更にここでは、リズムが関わると考えられる。会話におけるリズム(conversational rhythm)とは、アクセントとして知覚される音節を拍として、その拍の連鎖が等間隔として認識される場合を指す(Auer et al. 1999: 23 ff)。話段の終了直前の発話【109】にはリズム、つまり拍の連鎖が観察された(/の直後の音節が拍)。一方、【107-108】まではリズムが形成されず、また発話末尾イントネーションは平坦または緩やかな上昇であった。会話では通常、発言内容が考えられながら話される。リズムが形成されるということは、発話のデザインが完成し、発言内容がある程度決まっているので

⁵ 生理的に決定する声域(voice range)とは異なる。自然会話を対象とした音声研究では、ピッチレンジ(pitch range)とは「ある会話データ中にみられる話者の全体的な声の高さの範囲」のことを指し、ピッチ・レジスター(pitch register)とは「ある相互行為の最中に選択される話者の局所的な声の高さの範囲」のことを指す(cf. Szczepek Reed 2011: 79/89)。

あろう。つまり、ターンが間もなく終わる段階にある。そのためリズムの形成はターンの終了、つまり話段の終了を示唆すると考えられる。

5. まとめ

本稿では、TCUを手がかりに試験会話の中間部にみられる特定の展開パターンを分析し、展開パターンの一例を示した。特定の展開パターンとしては、「試験官の質問」→「学生の回答」→「試験官のコメント」→「学生の反応」という話段の連鎖がみられた。各話段の末部には、統語・音声・語用論全てのレベルで完了がみられた。特に「学生の話段」の内部は話者交替が発生し複雑な展開となることが多かった。しかし話者交替によって、複雑に会話が発展したとしても、話段が終了しないと次の局面へは移らない。

話段の展開パターンを上位のレベルと捉えるならば、話段内部つまり下位レベルでも特定の発話の連鎖がみられた。例えば「試験官の質問」の話段内部では、「質問」を中心に、「質問の前置き」や、「質問の理由」が前後に出現することが多かった。その場合、複数のTCUによってターンが組み立てられる。試験官が「質問」する場合、1つの「質問の発話」のみからなる単一のTCUによるターンの形式をとることも想定される。しかし、そもそもターンの長さ・大きさというのはあらかじめ定まっているものではなく、相互行為の過程において調整、拡張（expansion）されうるものである（e.g. Sacks, Schegloff & Jefferson 1974, Auer 1996）。「試験官の質問」の話段では新しい話題が導入されるため、試験官は「質問の前置き」によってある話題へと学生の意識を向けさせ、それから「質問」をする。そして更に「質問の理由」を示すことで回答時に注意すべき点を事前に通知しているとも考えられる。一連の連鎖は、聞き手である学生DMに向けて発話の連鎖が展開された受け手志向（recipient design）によるものであろう。

また、話段の終了部分にみられるプロソディにも注目した。音声の場合、発話末イントネーションがターン終了の役割を担う。しかし話段の場合、ターンの終了によって話者が交替したとしても、それだけで会話の展開上の局面が変化するわけではない。しかも、ターンの終了が認識されて初めて話者交替が発生するとも限らない。本稿では、発話末イントネーションのほか、様々なプロソディが話段の終了とともに共起していることを示した。例えば、ピッチ・レジスターが低いこと、話速が遅いこと、直後に長いポーズが発生していること、リズムが形成されていることなどであった。ターンを長く保持している場合には、ターン全体の構成や局面などの影響を受け、発話末イントネーション

以外のプロソディも共起していると考えられる。

複数のTCUで構成されたターンの場合、どこに区切りがあり、どのように会話参加者がターンの終了を認識するのかについては、議論がある。会話参加者は、相互行為の過程において、さまざまな言語的特徴・非言語的特徴をリソース（resource）として手がかりを得て会話を構築していく。本稿ではプロソディの分析は一部を示したに過ぎない。話段と話段との繋がりや、話段内部で発生した話者交替の前後の発話の繋がりにおいて、プロソディがどのように関わってくるか。今後、事例研究を重ねることで傾向を見出すことを目指す。将来的には、「話段」の単位を軸に、さまざまなレベルでの音声分析の成果をドイツ語の音声教育にも応用していきたい。

謝辞

本研究で扱ったデータのトランスクリプトの作成の段階で行った音声の聴覚分析には、2名のネイティブ・スピーカーの協力を得た。この場を借りてお礼を申し上げる。

トランスクリプト：

GAT 2 (Selting et al. 2009/Couper-Kuhlen & Barth-Weingarten 2011) に基づく

| | |
|------------|--|
| [] | overlap and simultaneous talk |
| °h, °hh | inbreath of appr. 0.2-0.5/ 0.5-0.8 sec. duration |
| h°, hh° | outbreath of appr. 0.2-0.5/ 0.5-0.8 sec. duration |
| (.) | micropause (under 0.2 sec.) |
| (0.5) | measured pause of 0.5 sec. |
| ((hustet)) | non-verbal vocal actions and events |
| = | fast, immediate continuation with a new turn or segment |
| : | lengthening, by about 0.2-0.5 sec. |
| ʔ | cut-off by glottal closure |
| akZENT | focus accent |
| akzEnt | secondary accent |
| ak!ZENT! | extra strong accent |
| ? | rising to high |
| , | rising to mid |
| - | level |
| ; | falling to mid |
| . | falling to low |
| ↑ | smaller pitch upstep |
| ↓ | smaller pitch downstep |
| <<t> > | lower (<i>tiefer</i>) pitch register |
| <<len> > | lento, slow |
| / / | rhythmic unit |

引用文献

- Auer, Peter (1996): "On the prosody and syntax of turn-continuations" In: Couper-Kuhlen, Elisabeth and Selting, Margret (eds.) *Prosody in conversation. Interactional studies*. Cambridge: Cambridge University Press, 57-100.
- Auer, Peter, Couper-Kuhlen Elisabeth and Müller, Frank (1999): *Language in Time: The Rhythm and Tempo of Spoken Interaction*. Oxford: Oxford University Press.
- Boersma, Paul and Weenink, David (2016): *Praat: doing phonetics by computer* [Computer program]. Version 6.0.21, retrieved 25 September 2016 (<http://www.praat.org/>).
- Couper-Kuhlen, Elisabeth (2004): "Prosody and sequence organization in English conversation: The case of new beginnings." In: Couper-Kuhlen, Elisabeth and Ford, Cecilia E. (eds.) *Sound patterns in interaction*. Amsterdam: Benjamins, 335-376.
- Couper-Kuhlen and Barth-Weingarten, Dagmar (2011): "A System for Transcribing Talk-in-Interaction: GAT 2" Translated and adapted for English by Elizabeth Couper-Kuhlen and Dagmar Barth-Weingarten. *Gesprächsforschung - Online-Zeitschrift zur verbalen Interaktion*. 12, 1-51. (www.gespraechsforschung-ozs.de)
- Couper-Kuhlen, Elisabeth and Selting, Margret (2001): "Introducing Interactional Linguistics." In: Selting, Margret and Couper-Kuhlen, Elisabeth (eds.): *Studies in Interactional Linguistics*. Amsterdam: Benjamins, 1-22.
- Drew, Paul and Heritage, John (1992): "Analyzing talk at work: an introduction." In: Drew, Paul and Heritage, John (eds.): *Talk at work. Interaction in institutional settings*. Cambridge: Cambridge University Press., 3-65.
- Ford, Cecilia E. and Thompson, Sandra A. (1996): "Interactional units in conversation: syntactic, intonational, and pragmatic resources for the management of turns." In: Ochs, Elinor, Schegloff, Emanuel A. and Thompson, Sandra A. (eds.) *Interaction and grammar*. Cambridge: Cambridge University Press., 134-184.
- Gilles, Peter (2005): *Regionale Prosodie im Deutschen: Variabilität in der Intonation von Abschluss und Weiterweisung*. Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Gumperz, John J. (1982): *Discourse strategies*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Hakulinen, Auli (2009): "Conversation types." In: D'hondt, Sigurd, Östman, Jan-Ola and Verschueren, Jef (eds.) *The Pragmatics of Interaction*. (Handbook of Pragmatics Highlights 4) Amsterdam: Benjamins., 55-65.
- Henne, Helmut und Rehbock, Helmut (2001⁴): *Einführung in die Gesprächsanalyse*. (Vierte, durchgesehene und bibliographisch ergänzte Auflage) Berlin/New York: Walter de Gruyter.
- Levinson, Stephan. C. (1983): *Pragmatics*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Peters, Jörg (2014): *Intonation*. Heidelberg: Universitätsverlag Winter.
- Sacks, Harvey, Schegloff, Emanuel A., and Jefferson, Gail (1974): "A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation." *Language*. 50, 696-735.
- Schegloff, Emanuel A. (1996): "Turn organization: one intersection of grammar and interaction." In: Ochs, Elinor, Schegloff, Emanuel A. and Thompson, Sandra A. (eds.) *Interaction and grammar*. Cambridge: Cambridge University Press., 52-133.
- Selting, Margret (2000): "The construction of units in conversational talk." *Language in Society* 29, 477-517.
- Selting, Margret, Peter Auer, Dagmar Barth-Weingarten, Jörg Bergmann, Pia Bergmann, Karin Birkner, Elizabeth Couper-Kuhlen, Arnulf Deppermann, Peter Gilles, Susanne Günthner, Martin Hartung, Friederike Kern, Christine Mertzlufft, Christian Meyer, Miriam Morek, Frank Oberzaucher, Jörg Peters, Uta Quasthoff, Wilfried Schütte, Anja Stukenbrock, Susanne Uhmann (2009): "Gesprächsanalytisches Transkriptionssystem 2 (GAT 2)" *Gesprächsforschung-Online-Zeitschrift zur verbalen Interaktion*. 10, 353-402. (www.gespraechsforschung-ozs.de)
- Szczepek Reed, Beatrice (2011): *Analysing conversation: An introduction to prosody*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- ザトラウスキー, ポリー (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』東京: くろしお出版